

東日本大震災から 10 年を振り返って、 にじいろクレヨンの活動を通して

特定非営利活動法人 にじいろクレヨン
理事長 柴田 滋紀

東日本大震災発災後に私自身も身を寄せた避難所で子どもたちの居場所作り、遊び場作り活動をする「にじいろクレヨン」を立ち上げました。1日1時間半歌ったり踊ったり、鬼ごっこやかくれんぼをしたり、遊び道具はなくてもみんなで遊んで過ごしました。子どもたちは暇なのでわらわらと集まってきました。3・4歳の幼児から中学生位まで毎日20人ぐらい集まってきました。

生活もままならない混乱の中、とにかく子どもたちの笑顔を取り戻そうと無我夢中で駆け抜けました。悲しみや絶望の中、大人たちは子どもたちの気持ちに目を向ける余裕さえ持てない状態だったと思います。子どもたちは彼らなりに苦しい環境の中我慢して日々を過ごしているように見えました。次第に目の輝きを失っていく子どもたちを見て、私は自分に何ができるかと考え、子どもたちの遊び場を作ることになりました。暴言暴力、過剰なスキンシップなど表現は様々でしたが、その裏には子どもたちの甘えたい、認めてほしい、寂しい気持ちをわかってほしい、という訴えが伝わってきました。そんな子どもたちを見て、環境を劇的に変えることはできないが、とにかく寄り添っていこうと決めました。

避難所でも仮設住宅でも子どもたちのことはいつも後回しにされていました。生活を立て直すのに仕方がない部分もあったと思いますが、大人たちの都合で社会が動いていました。

震災から毎日ひたすら活動を続けてきた1年後に、たまたま榴岡児童館を見学させていただく機会がありました。衝撃でした。石巻にはこんな子どもたちの場所なんて見たことがない。子どもがこんなにも活き活きと生きている。のびのびと過ごしている。こういう場を石巻にも作りたいと心の底から思いました。

今でこそ「子どもセンターらいつ」ができて児童館という言葉が定着しつつありますが、石巻には児童館という文化そのものがありませんでした。厳密に

いうと震災前にもひとつだけあったのだけれども、石巻の人はほぼ知りませんでした。

仮設住宅や復興住宅の訪問活動と並行しながら、無いんだったら児童館をつくっちゃえと、2014年から勝手に児童館を始めました。民設民営児童館「のくのくハウス」。元韓国料理屋さんの建物を活用しました。契約の関係で移転することになった2018年まで5年間継続しました。

2019年からは、「まっちゃん八百屋児童館」を立ち上げました。八百屋と児童館を掛け合わせるたぶん世界初の試みだったと思います。のくのくハウスで子どもたちはいっぱい来るけど、地域の方が入りにくかったという課題がありました。だったら最初から地域の方が集まる場所で児童館をやってみよう。結果、狙い通り世代を超えた交流が生まれておりました。八百屋ならではの、さつまいもを仕入れて、子どもたちと焼き芋を焼いて売って、活動費をまかなったりと毎日楽しく試行錯誤しました。黄金の鍋焼き芋なんて商品を開発したりして。

そして今、「にじいろ農園児童館プロジェクト」(建物はないけど)にチャレンジしています。

地域の方が気軽に参加できるように屋外の環境で、子どもたちは野菜を育て四季を感じながら、みんなが自分らしく過ごせる場づくりをしています。

設立当時、「どうにか10年は子どもたちに寄り添っていこう」と目標にした活動期間は、無事に達成することができました。

そして今は、形は違えども、榴岡児童館で見た子どもたちが生き生きと目が輝いている場を石巻に作り続けたい、地域に根ざして子どもたちが生きていくことができる場を作り続けたい、そう心に秘めています。

